

I 研究主題

生きる力をはぐくむ授業の展開

～自己学習力を育てる指導の工夫～

II 主題設定の理由

平成20年の学習指導要領の改訂を受け、平成23・24年度の完全実施へ向けて今年度から移行措置期間が始まった。今回の改訂の重点は、生きる力を育成するために基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、それらを活用し、思考力・判断力・表現力等の確かな学力をはぐくむことである。また、21世紀は「知識基盤社会」とも言われ、その社会の実現という観点からも同様の力が求められている。そして、変化する社会の中でこれらの知識・技能・能力を常に使えるようにしておくことが求められている。

つまり、生きる力を育成するためには、変化する社会に対応するために生涯にわたって自ら学び続ける能力や意欲が必要である。

そこで、本研究所では、「既有的な学習経験や生活体験からの興味・関心・意欲を基に、自ら課題を見出し、自分なりの見通しをもち、自ら思考・判断したり表現したりしながら解決し、その結果をまとめ振り返るとともに、自己の学習を分析・修正する一連の活動」を自己学習サイクルとし、それを構築し推し進めていく力を自己学習力と定義することにした。そして、昨年度までの本研究所の研究の成果や課題等からも、生きる力をはぐくむためには、この自己学習力を育成することが必要であると考えた。

これらのことから、授業の中で自己学習サイクルを構築したり、推進したりする手立てを工夫すれば、自己学習力が育ち、そのことによって生きる力をはぐくむことができると考え、本主題を設定した。

III 研究の仮説

仮説1

授業において、協同的な学習を取り入れたり、自己の学習を分析させたりすることで個の学習の質を高めれば、児童生徒は集団の中で学ぶ楽しさを味わいながら自発的に学習に取り組むようになり、自己学習サイクルを構築することができるであろう。

仮説2

授業において、教師の言葉かけやお互いに認められたうれしさを感じさせる相互評価の方法を工夫することで学習への意欲を高めれば、児童生徒は、学ぶ楽しさを味わいながら自主的に学習を進めるようになり、自己学習サイクルを推進することができるであろう。

IV 研究の内容

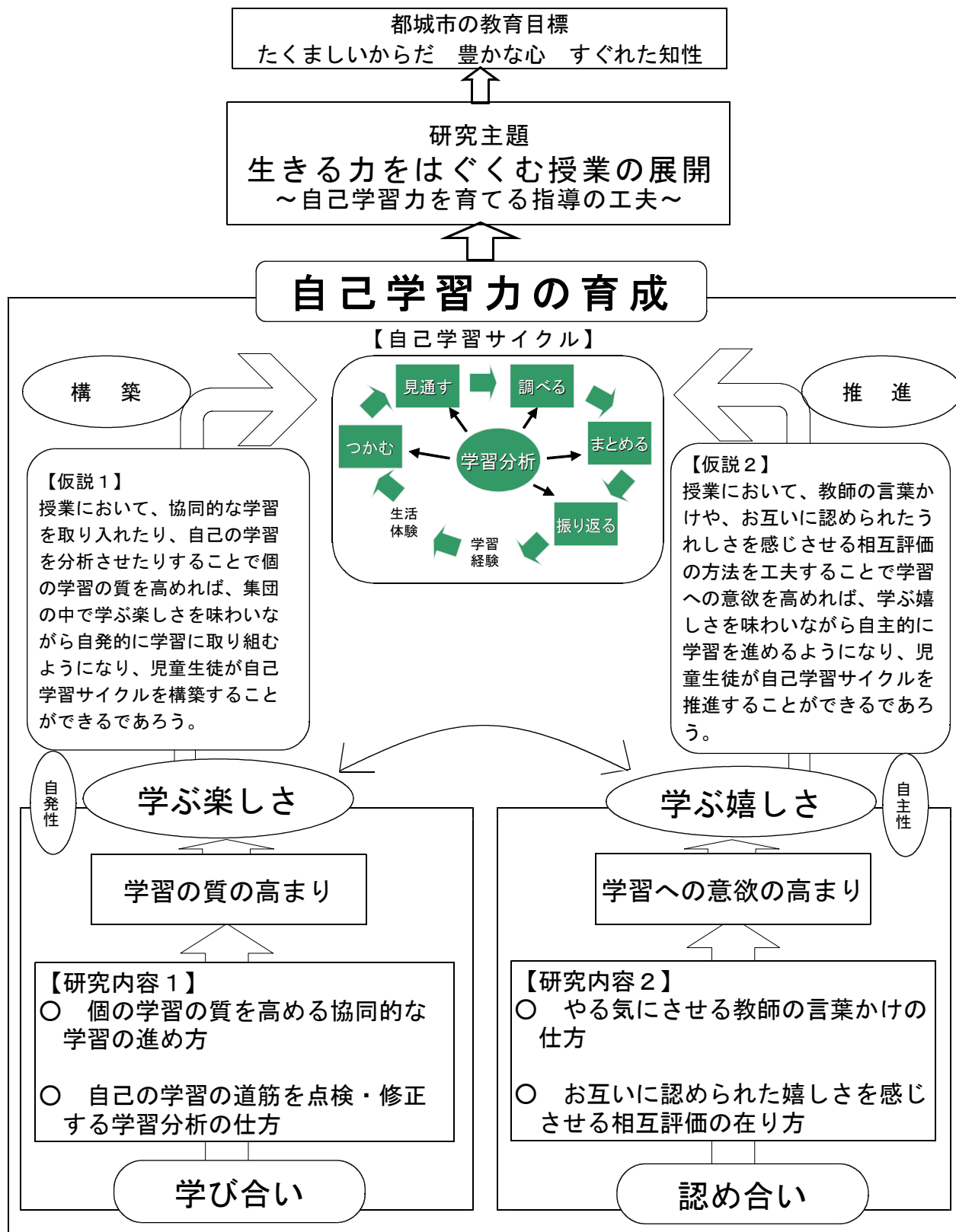
1 仮説1についての内容(自己学習サイクルの構築)

- (1) 個の学習の質を高める協同的な学習の進め方
- (2) 自己の学習の道筋を点検・修正する学習分析の仕方

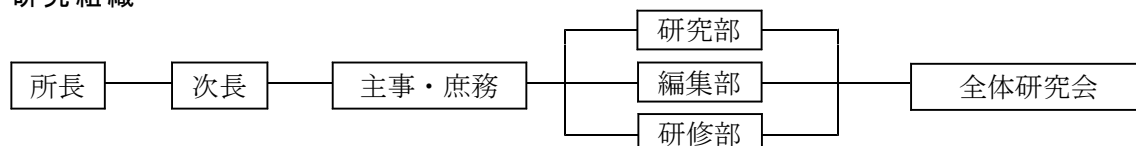
2 仮説2についての内容(自己学習サイクルの推進)

- (1) やる気にさせる教師の言葉かけの仕方
- (2) お互いに認められた楽しさを感じさせる相互評価の在り方

V 研究の構想



VI 研究組織



VII 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 生きる力について

生きる力とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、「豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」の3つの要素からなる力

本研究においては、「生きる力」をはぐくむために必要な知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等までを含めた「生きる力」の知の側面に着目して研究を進めることにした。

(2) 自己学習力について

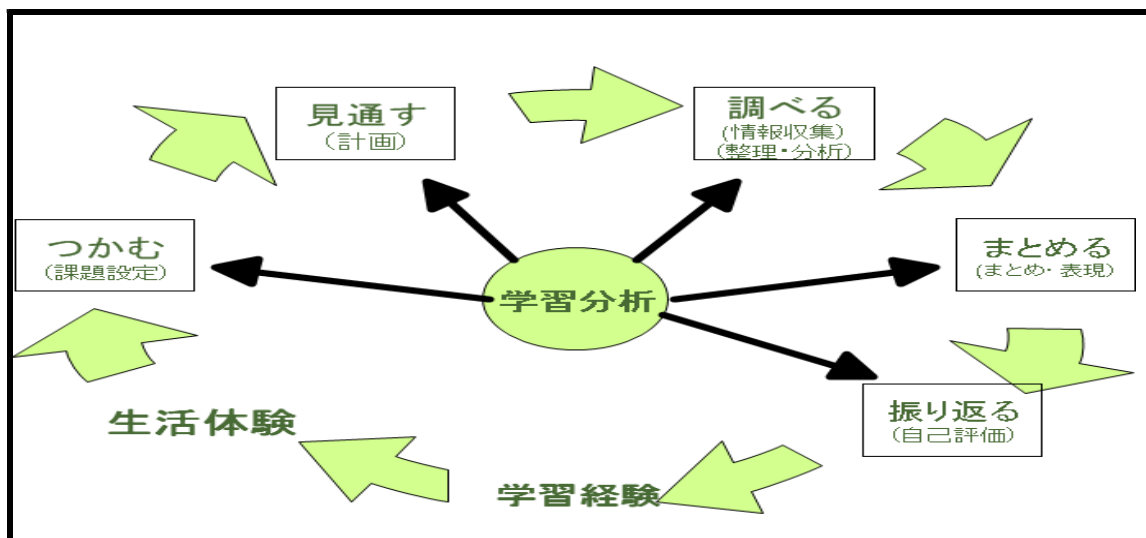
自己学習力とは、自己学習サイクルを自ら構築し、推進していく力

自己学習力を育成するためには、学び合いを通して学習の質を高め、学ぶ楽しさを味わわせたり、認め合いを通して学習への意欲を高め、学ぶ楽しさを味わわせたりすることが重要である。学ぶ楽しさが自発性を伸ばし、自己学習サイクルの構築につながり、また、学ぶ楽しさが自主性を伸ばし、自己学習サイクルの推進につながる。

(3) 自己学習サイクルについて

自己学習サイクルとは、既存の学習経験や生活体験からの興味・関心・意欲を基に、自ら課題を見い出し、自分なりの見通しをもち、自ら思考・判断したり表現したりしながら解決し、その結果をまとめ振り返るとともに、自己の学習を分析・修正する一連の活動

「つかむ」、「見通す」、「調べる」、「まとめる」、「振り返る」といった問題解決的な学習は、この自己学習サイクルの中に含まれる。



【図1 自己学習サイクル】

2 自己学習サイクルを構築する手立て

(1) 個の学習の質を高める協同的な学習の進め方

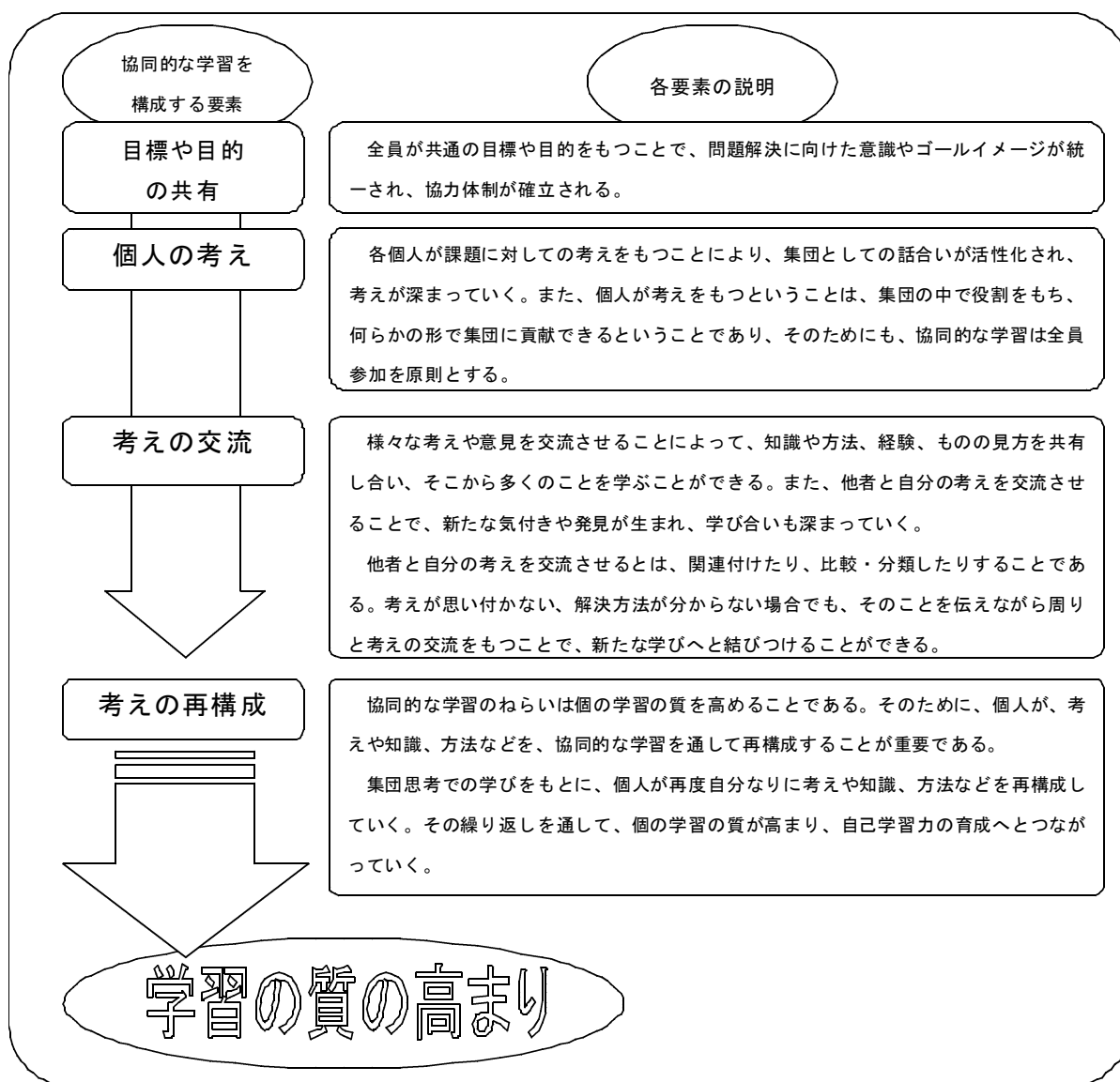
ア 協同的な学習について

協同的な学習とは、集団における学習者が、共通の目標や目的をもち、それぞれの考えを基に、お互いの考えを交流させながら、新しい考えを主体的に構成し、課題を解決したり、目標を達成したりしようとする学習活動

協同的な学習の流れでは、個人思考→集団思考→個人思考の過程を原則としている。

イ 協同的な学習を成立させる要素とその内容

上記の協同的な学習の定義を満たす要素には「目標や目的の共有」、「個人の考え」、「考えの交流」、「考えの再構成」がある。授業の各場面に位置付けられた4つの要素が満たされることによって、はじめて協同的な学習が成立する。集団活動という意味でグループ活動に包括されるが、4つの要素から、目的や個人の立場がより明確であり、単なるグループ活動とは異なる。



(2) 自己の学習の道筋を点検・修正する学習分析の仕方

ア 学習分析について

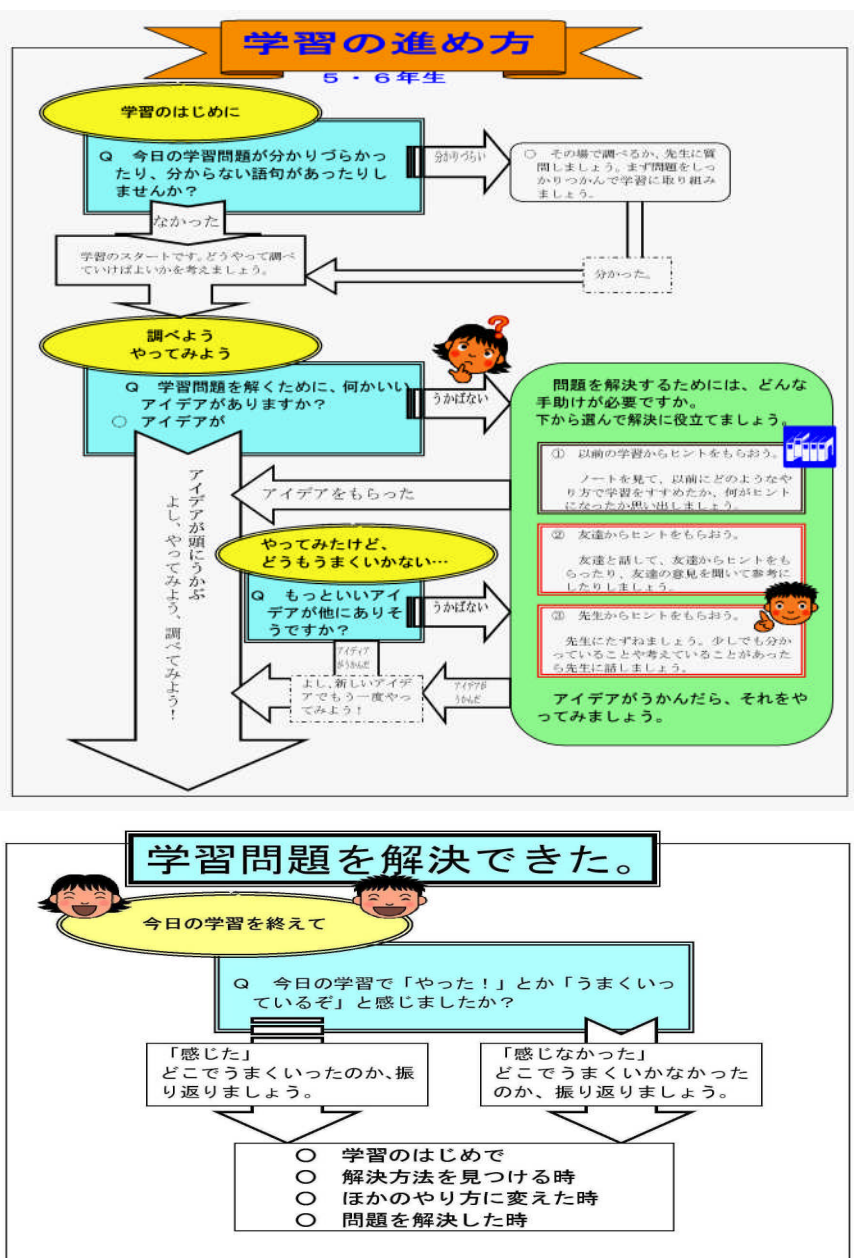
学習分析とは、問題解決的な学習の中で、目的（なぜその課題を追求してきたのか）や内容（何を明らかにしようとしているのか）、それらの方法（どのようなやり方で追求すべきなのか）などが、適切な状態であるかどうかを自らに問いかけて分析し、常に適切な状態に修正すること

児童生徒が学習分析を行いながら学習を進めていくためには、まず学習の局面毎に自分に問いかけ、自分の考えや学習の進み具合を把握することが大切である。次に、自分の課題に対して解決の仕方を考え、実行していくことも大切である。これによって課題が明確になり、児童生徒が学ぶ楽しさを味わいながら自発的に学習に取り組むようになり、自己学習サイクルを構築することができる考える。

イ 学習の進め方の提示

自分への問いかけと課題解決のヒントをまとめて「学習の進め方」として掲示した。これにより、児童生徒一人一人が自分の学習している段階に応じた学習分析を行い、自主的な問題解決の手立てとなった。

また、学習の進め方においては、学習の途中で自分は何が分かっているのか、分かっているのかを自己に問いかける手助けとなるよう、一斉にまたは個別に活用を促した。



【図2 学習の進め方 高学年用】

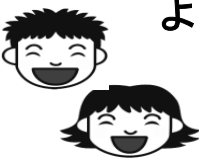
3 自己学習サイクルを推進する手立て

(1) やる気にさせる教師の言葉かけの仕方

児童生徒の意欲を高めるためには、教師の言葉かけを工夫する必要があると考えた。そこで、言葉かけのポイントを検討し具体例を整理した。

ア 教師の言葉かけのポイントについて

児童生徒をやる気にさせる言葉かけ 3つのポイント



よいところを具体的に伝える

単なるご褒美としての褒め言葉ではなく、「よーし、やってみよう！」という気持ちが持続される言葉かけ



勇気付けるように話す

児童生徒の関心・態度や努力の過程にも注目し、気付きを促し可能性を引き出す言葉かけ



何をどうすればよいかを示す

児童生徒がゴールイメージをもちやすく、何(どこ)から取りかかればよいのかが分かりやすい言葉かけ

【図3 教師の言葉かけリーフレット】

(ア) よいところを具体的に伝える

うまくいってないところ、努力すべきところを次々と指摘する前に、まずは児童生徒のできているところを認めるようにする。そして、肯定的な言動をできる限り具体的に、適切なタイミングで伝える。また、言葉をかけた後には、こちらの意図が正しく伝わっているかどうかを確認することも大切である。

(イ) 勇気付けるように話す

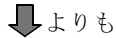
児童生徒が、自分で考え決めていけるような言葉かけをする。そして、機械的に評価を与えるのではなく、児童生徒の気持ちを汲み取り共感することで、嬉しさや喜びが生まれ、やる気につながっていく。また、児童生徒のことを一旦受け入れ、共感を示した後、時には「先生は～のように思うのですが、」「先生は～のように感じました。」など、教師側の感情や思いを伝えることも有効である。

(ウ) 何をどうすればよいかを示す

児童生徒の望ましい姿を見つけたら、周りの児童生徒にはよいモデルとして注目させ、ゴールイメージを示す。その際、児童生徒が自身の学習をコントロールし、修正が可能になるよう配慮する。また、学習中の言葉かけを児童生徒から求められた時、「先生、これどうですか。」と尋ねられた時に行うと、より効果的になる。

(7)-① 肯定的具体的に伝える

「90点だね。すごいね！」



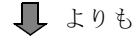
「定規を使って丁寧に引いているね。」

「計算スピードが上がったね。」「A君に分からないところを教えてあげたんだね。A君も嬉しそうだね。」

※ 認め合う言葉かけへの発展をめざして

「全部マル。えらいな。」(結果重視)

「やる気出さなきゃだめ。」(叱責)



「昨日よりもできるようになったね。」(成長・伸び)

「一生懸命に考えてくれてうれしいな。」(承認)

「間違いがあると勉強になるね。」(学び合い・貢献)

(7)-② 現状を認める

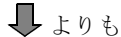
「台上前転がまだできないのはあと5人だよ。がんばれ。」



「手を付いて腰を上げるところまでできたね。すごく努力したんだね。」

(7)-③ 適切なタイミング

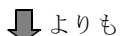
「あなた何やってるの。さっきもそうだったでしょ。」



「今やっている口笛。やめてもらえないかな。」「姿勢がいいねえ。うれしいなあ。」

(7)-④ 伝わっているかの確認

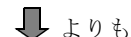
「何をすればいいか分かった？できるはずだからしっかりがんばりなさい。」



「今どのくらいできてる？これから何をどうするか、先生に教えて。」「いつやる？」「何回やる？」

(4)-① 自己決定を促す

「その方法でも無理よ。この方法でしてみたら。」



「この方法とこの方法があるよ。どっちにする？」「どうしたらできるかな？」

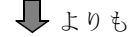


うれしいな。

(ウ)-① よいモデルに注目

「また、姿勢が悪い人がいる。」

「話を聞く態度がよくないよ。」

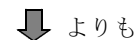


「〇さん、いつもうなずいて聞いてくれてありがとう。先生は、すごく気持ちいいよ。」

「〇君のやり方はいいと思うなあ。」

(ウ)-② 学習の変容が可能

「お、いいねえ。でも、もう少しがんばれ。」



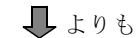
「ここまでは順調にいったね。この前学習したのは使えないかな？」

「〇〇をこうすると、さらによくなると思うよ。」

(ウ)-③ 求めに応じる

「どこでつまづいているの？」

「早くしなさいね。」



「そうなんだ。そこまではできたんだね。」

「先生にできることは何かないかな？」「先生にしてほしいことがあったら言ってね。」

よーし、やるぞー！

(4)-② 気持ちに寄り添い共感する

「なんで分からないことを分からないと言わないの。」



「そうか、迷っていたんだ。辛かったね。」「悔しいね。」「できるようになったね。うれしいね！」

(4)-③「私は」メッセージ

「〇〇君は絵がうまいねえ。」



「先生は、この絵は素敵だと思うな。まるで空を飛んでいるみたい気分になるよ。」



(2) お互いに認められた嬉しさを感じさせる相互評価の在り方

ア 基本的な考え方



イ 評価の方法

評価の方法としては「話し合い法」、「カード記入法」を用いて実施する。

話し合い法

活動の途中や終わりなどに集団で検討する活動を設定する。その際、次のような観点で話し合わせる。

〔評価の観点〕

- ① よい点を見付け、何故よいか発言する。
- ② 間違いや足りない点を見付け、どうしたらよくなるか提案する。
- ③ 友達のよさを自分の考えに生かす。

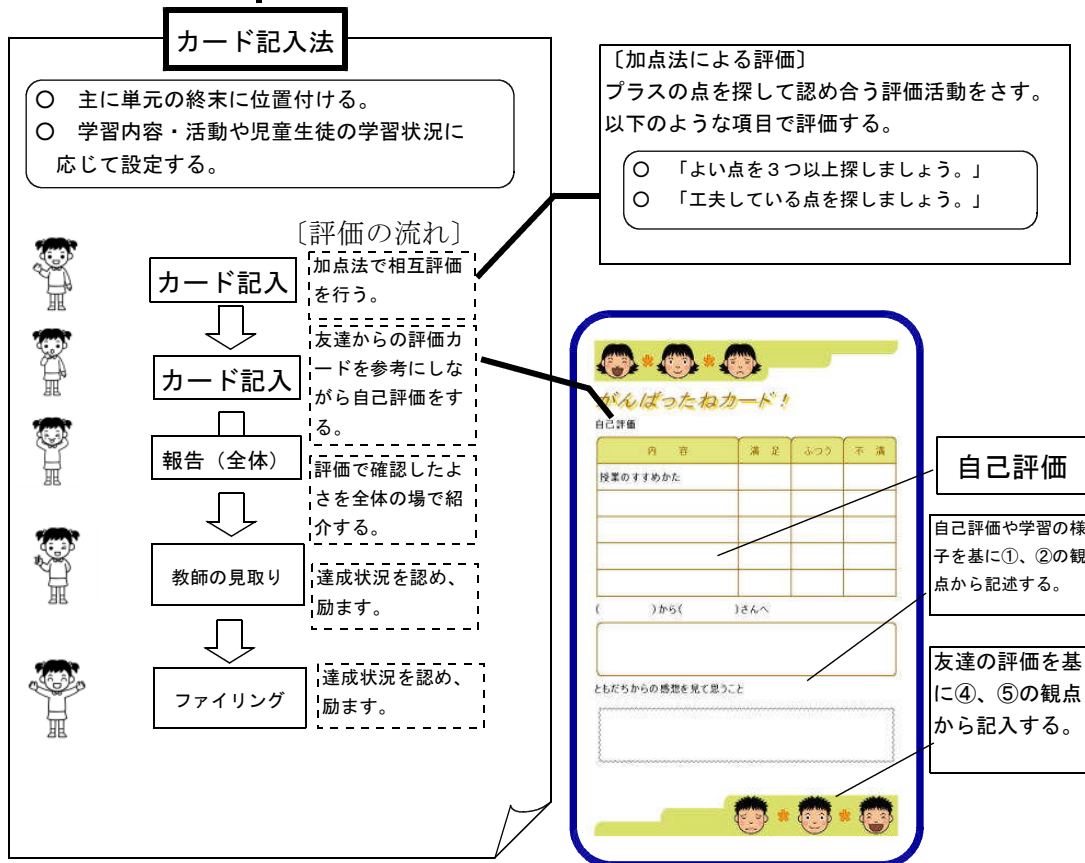
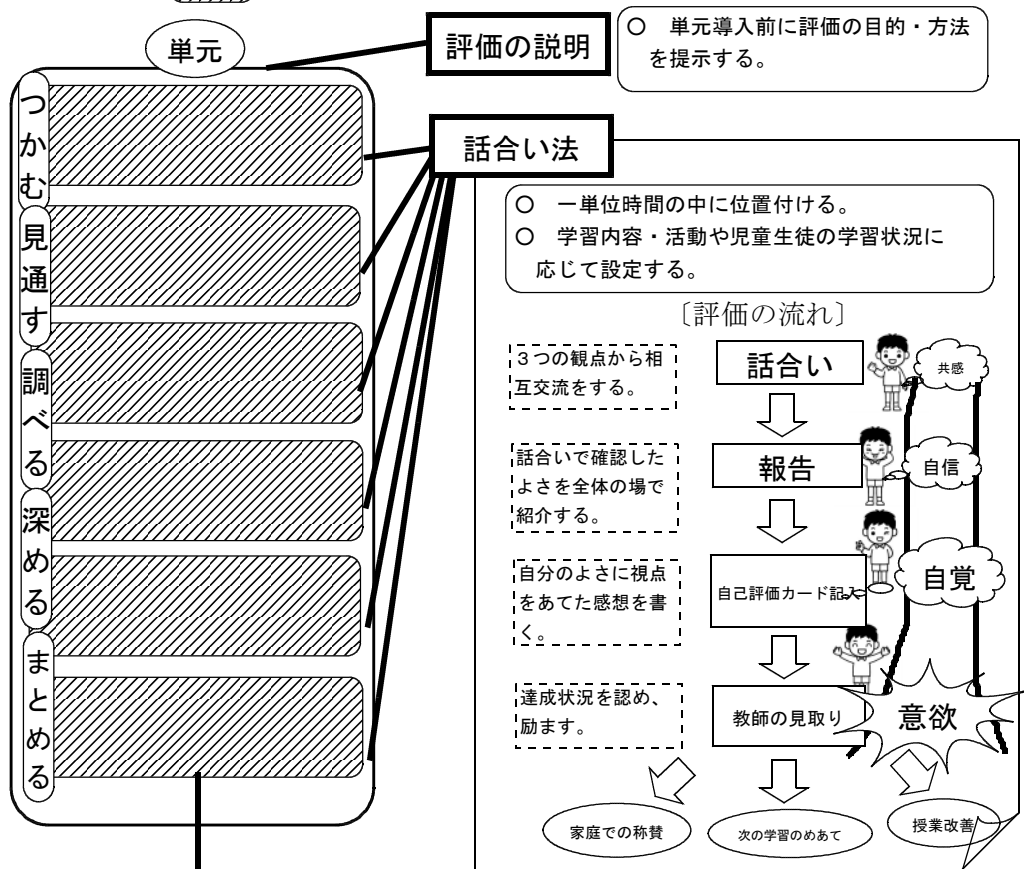
カード記入法

カード記入法は主に終末段階で実施する。観点としては以下のとおりである。

〔評価の観点〕

- ① よい点を見付け、何故よいか記入する。
- ② 間違いや足りない点を見付け、どうしたらよくなるかアドバイスを書く。
- ③ 友達のよさで自分の考えに生かしたいことを書く。
- ④ 自分が友達から学んだことを書く。
- ⑤ 評価されたことへの感想を書く。(単元終末のみ)

ウ 評価の流れ . . . 一単位時間



Ⅷ 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 仮説 1 について

- 協同的な学習によって、児童生徒が学ぶ楽しさを感じ、意欲も高まっていることが、児童の姿や意識調査の結果から確認できた。
- 検証授業において、学習分析を行わせることで、自分の学習を振り返り、次の学習活動へ意欲的に取り組むことができた。

(2) 仮説 2 について

- 「児童生徒をやる気にさせる言葉かけ」のリーフレットは、教師向けの資料として大変役に立ち、有効であることが分かった。
- 検証授業において、お互いを認め合う相互評価を行わせることで、グループ活動の際に今までよりもしっかり他の人の話を聞き、積極的に活動を行うようになった。

2 今後の課題

(1) 仮説 1 について

- 「学習の質の高まり」という視点から、協同的な学習のより効果的な進め方を研究する必要がある。
- 自己の学習を点検・修正する力を高めるための方法について、さらに研究を進める必要がある。

(2) 仮説 2 について

- 「児童生徒をやる気にさせる言葉かけのポイント」と実際に使われる言葉かけとの関連を検討し、用例の充実も含め、整理していく必要がある。
- 児童生徒の評価する力を高めるための、評価活動の継続的な取組方法や、学習活動での評価の観点を意識させる工夫などをさらに研究していく必要がある。

《参考文献》

- 「小学校学習指導要領」 文部科学省
- 「中学校学習指導要領」 文部科学省
- 「学校の挑戦 ―学びの共同体を創る」 佐藤 学 小学館
- 「学習の輪 ―アメリカの協同学習入門」 デイヴィット・W・ジョンソン
イデッス・ジョンソン・ホルベック
ロジャー・T・ジョンソン 二瓶社
- 「学級再生のコツ」 諸富 祥彦 学研

《研究同人》

都城市教育研究所所長	野 村 勝 由	都城市立志和池小学校	萱 嶋 秀 雄
都城市教育研究所次長	上 田 雄 二	都城市立祝吉小学校	坂 元 祐 征
都城市教育研究所主事	南 中 道 隆	都城市立高城小学校	西 慎 吾
都城市教育研究所主事	後 藤 世志哉	都城市立明道小学校	石 本 隆 士
都城市教育研究所主事	菊 池 真寿美	都城市立西岳小学校	日 高 茂
都城市教育研究所主事	近 藤 公 博	都城市立縄瀬小学校	松 浦 悟 史
都城市教育研究所主事	二 宮 正 志	都城市立祝吉中学校	枇 杷 善 彦
都城市教育研究所庶務	小岩屋 美 香	都城市立吉之元小学校	酒 井 昭 弘
都城市立志和池中学校	日 高 和 弘	都城市立妻ヶ丘中学校	元 田 正 幸